

14

一般社団法人 日本駆け込み寺

□公開日時:平成 24 年 9 月 18 日(火)

□相談年度:平成 21 年度

■自殺を決意した無気力草食系男子■

～通り魔事件で何かが弾けた心を生き返らせる～

友達も恋人もおらず、仕事先と家の往復だけの生活をしてきた男性は、とある事件をきっかけに死を考えるようになる。だが、ひょんなことから福祉施設のボランティアをすることに。

■仮名：沢田さん

■年齢：37歳

■性別：男性

■問題：自殺

【死を決意した孤独な青年】

彼は有名私立大学の哲学科を卒業後、ずっとビル管理の清掃の仕事をしてきた。小声でぼそぼそと話すこと以外は、どこにでもいるような普通の青年に見える。家族は父親と兄と妹。母親は早くに離婚して家を出ている。家族とは同じマンションに住んでいるが会話はしない。家賃は父親が払っている。食卓と一緒に囲むことはなく、それぞれが勝手に食べている。まったく人とつながっておらず、もちろん友達もない。職場の同僚との会話もなし。仕事を終えて帰宅したら、ひとりで食事をして8時か9時には寝てしまう。たまに図書館に行って本を読む以外は特に何もしない。

とにかく無気力、無感動、無関心、無行動。そんな彼が、2008年6月の秋葉原通り魔事件で何かを感じた。「おれの人生って何だ?」そう自問自答したが、いくら考えてもわからない。ようやく出た答えは、「もういい、やるべき事は全部やったし生きていてもしょうがない」ということ。

【週2日、1時間の掃除】

「こんな駆け込み寺を開いて何になるんですか?はっきり言ってまったく無価値なことをしてませんか?」ぼそぼそした小声なのだが、こんなことを言うてくる。いろいろ話をしていく中で、そのうち秋葉原の事件の話題になった。「7人も殺すなんて勇気あるよなって思うんです」。「えっ、勇気あるってちょっと違うでしょ。あれは勇気じゃできない。おまえ、ちょっとおかしくない?」、「僕はそんな勇気がないから、今年、凍死(自殺)するつもりです。ああいうことはできないけれど、逆に凍死ならできるから」私はいつものように彼に話した。「そんなのもったいない。だったら死ぬまで、おまえの命、使わせてよ。やりたいことがいっぱいあるんだ。当分は私の代わりにやってくれないか」、「何を、ですか?」 「掃除」。それから彼は週に2回、1時間、駆け込み寺とつながりのある介護施設で掃除をしている。1ヶ月に1度、駆け込み寺に来て、ここでも1時間ほどかけて周辺の道路の掃除をし、私と少し話す。彼は警戒心が強く、過去の事はまったく語らない。でも唯一、彼は何かを果たしたくて、不器用だけれど、訴えに来ているということはひしひしと伝わってくる。

【人間には「必要とされている」感が必要】

「僕、役に立っていますか?」ときどき彼は私に聞いてくる。「大いに助かってる。本来、私がやるべきことをお前がやってくれて本当に助かっているよ。介護施設の所長さんからは、会うたびに感謝されているし。それに、駆け込み寺は地域密着でやっていかないといけないから、お前がやっていることはすごい広報になっているんだよ」。「じゃあ、よかったです。とりえず当面は頑張ります。玄さんの役に立つのだったらやります。ある意味、玄さんの代わりですよ」 「そう、そう。代わりだから一生やってくれてもいいから」彼は私の代わりだと感じ、それに何か感じるところがあったようだ。「私の代わりに掃除しろ」、「そうすることによってどうなるんですか」、「俺が助かるでしょ」、「ああ、玄さんが助かるのなら、当分やってみようかな」、「今日死ななくても、明日に死んでも、一緒でしょ。どっちみち死んだような命なのだから。そうしたら私のためにちょっと頑張ってくれ。代わりに掃除をしてくれ。1日でも長く」

彼には「カンフル剤」的なことはしなかった。彼に必要なことは、言葉で云々言うより体を動かすことだと思ったからだ。「約束だからずっと来いよ。でも約束を破ったらおまえの家まで行くぞ」、「わかりました」。この約束は大事である。親も会社も彼には何も期待していない。無関心なのだ。その点、私は彼の成長の可能性を信じているから、ある意味厳しく接する。どんな人間だって存在を認められたい。ありのままを丸呑みしてくれる人間と出会いたい。そこから生きる回路が生まれる。今現在も、もちろん彼は死ぬことを延期している。



芦川智一さん(左)から寄贈されたパソコンを受け取る玄代表(右)

【ここが POINT】

群れの中にいるからこそ、人は癒されていく。癒されるから生きる気持ちが高まるし、また精神修養にもなる。この例で大事なことは2つ。まず相手に「自分が必要とされている」という思いを持たせるということ。このために「約束」をし、「体を動かす」という仕事も提示した。次に大事なことは、「約束」を守る、ということだ。これは私自身が決して彼を裏切らないこととともに、彼にもそれを厳しく守らせる、ということにもなる。この厳しさが彼の人生にリアリティを持たせる。そして「自分だけの人生を生きている」という実感につながる。人とのつながりが、人を救うことになる。